

次の文を読んで、後の問いに答えよ。(60点)

(赤坂憲雄『旅学的な文体』による。ただし問題作成の上から本文の一部を改めた。)

都合により省略

都合により省略

都合により省略

都合により省略

都合により省略

## 二 次の文を読んで、後の問いに答えよ。(60点)

「そうしないこともできたはずだ」という私の思いは、そのとき私が「自由であった」という思いとリンクしています。とはいえ、ここで頭の切り替えが必要なのですが、私は自由であるがゆえに、後悔するのではない。あのとき私がAを自由に選んだから、Aを選ばないこともできたはずだ、とスイリョウするのではない。① まったく逆なのです。私はあのとき「Aを選ばないこともできたはずだ」という信念を抱くからこそ、私はAを自由に選んだと了解しているのです。つまり、自由とは、みずから実現したある過去の意図的行為に対して、「そうしないこともできたはずだ」(他行為可能という信念とともに生じてくる。この信念は根源的であり、ほかの何ものにも由来するものではない。そして、本書では「そうしないこともできたはずだ」という信念を——日常の使い方より広い意味を含んでいることを承知のうえで——「後悔」と呼びたいのです。日常的には、われわれはみずからなしたかなりの意図的行為に対して「そうしないこともできたはずだ」という信念を抱きつつ、ひとりで忘れていき、あるいは自分で忘れようと努力して、それにこだわることはない。だが、こうした操作をいくらしようとしても、どうしても「そうしないこともできたはずだ」という叫び声からだから消えないことがある。そのとき、われわれは「後悔にむせぶ」のですが、こういう強度の後悔から、「ああまたやっちゃった」と舌を出して苦笑いする程度の後悔まである。しかも、過去における自分のある意図的行為(H)に対する後悔とは、一度後悔したら固定されるのではなく、われわれが人生の経験を重ねていくにつれて、Hに対する態度もクルクル変わってくる。Hをはじめ激しく後悔したのだが、後に「これでかえってよかったのだ」と思うことすらあり、逆にはじめはなんともなかったのだが、後の人生の数々の出来事とのソウグウによって、Hが次第に大きな意味を担ってきて、激しく後悔するようになることもある。すなわち、Hに対する後悔とは、それが客観的にいかなるものであったかを確定することに留まらない。さらに、Hをどう解釈するか、さらにはこれからどういう人生を渡っていくべきか、という考察にまで及んでおり、その意味で過去に対する態度一般にかかっているのです。したがって、後悔とは過去を解釈することそのことであり、その解釈を通じて未来を形成することでもあるのですから、まさにわれわれの根源的な精神活動というわけです。

こうした根源的な精神活動としての後悔に「自由」という概念が呼応しており、われわれは後悔するがゆえに、自由という概念をセイコウにこしらえ上げるのです。過去には「いまからさかのぼって変えられない」という意味がもともと含まれており、その中核には「いまや取り返しがつかない」という思い、取り返したいのだけれど取り返しがつかない、という嘆息があります。この嘆息とは別に、過去が単に「過ぎ去った時」として存在しているわけではない。単なる「過ぎ去った時」としての過去とは、「そうしないこともできたはずだ」という後悔の感情を捨象した抽象形態にすぎないのです。

もし人間がまったく後悔しない生物であったとしたら、過去を形成することはないでしょう。われわれは未来を操作するため過去を形成すると言われることもありますが、その過去がすべてうまくわれわれの思いどおりに運んでいたとしたら、わざわざ未来を操作する必要はありません。動物のように、そのまま身体に組み込まれた本能どおりに動いていけば、すべてうまくいくはずなのです。しかし、人間にとって幸か不幸か、過去はほとんどすべて思いどおりではなかった。禍の連続でした。だからこそ、われわれはかつて生じた禍の原因をつきとめ、同じ禍をサけるためにその原因を取り除くかたちで未来を操作するのです。

未来を操作するのも、つまるところわれわれが「そうしないこともできたはずだ」と後悔するからなのです。しかし、どんなに後悔しても、われわれは過去をさかのぼって変えられないことを知っている。だからこそ、せめて未来に同じ禍を呼ばないように操作するのです。

ここで、カントの言葉を使えば、後悔は自由の「認識根拠(ratio cognoscendi)」だということです。

カントは、われわれは自由をそれ自体としては認識できず、道徳法則を通じてはじめて認識できるとみなしました。この場合、道徳法則とは、私の解釈では、「〜すべきである」という普遍妥当的法則ではなくて、「〜すべきであった」という普遍妥当的法則です。カントの挙げる事例に則して具体的に言えば「(約束を守るべきであるという動機のみに基づいて)約束を守るべきであった」となる。カントによれば、道徳的に善い行為は外形的に善い行為(適法的行為)である以上に、その動機が道徳法則への尊敬以外の何ものにも基づいてはならない。だから、例えば「自分のヒョウバンを落とさくはないために」約束を守ったとし

でも、それは自己愛という動機に基づくものだから、道徳的に善い行為とはみなされないのです。

では、なぜこうした道徳法則が自由の認識根拠になりうるのか？「くすべきであった」という道徳法則に対する意識、すなわち道徳法則に反していたという意識によって、はじめて私は「そのとき自由であった」ことが認識できるからです。私はあのとき「自分の評判を落としたりたくないために」約束を守った。だが、私はあのとき「約束を守るべきであるがゆえに」約束を守るべきであったことを知っている。私はあのとき「そうしないこともできたはず」すなわち「自由であったはず」であり、しかもそうしてしまっただから、不道徳だと責められるのです。

ですから、——興味深いことに——もし私がこれまで常に道徳的に善い行為を実践しつづけてきたなら(人間であるかぎりそういうことはないので)私は「そうしないこともできたはず」だという具体的な行為を見いだせず、「あのとき」自分が自由であったか否かを認識する場面が開かれないことになる。こうして、——興味深いことに——われわれは過去において道徳法則を遵守していたと自覚することによってではなくて、道徳法則に反していたという自覚をもつことによって、はじめて「自由であった」ことを認識できます。

(中島義道『後悔と自責の哲学』による。ただし問題作成の上から本文の一部を改めた。)

問1 傍線部A「それ」とは何を指すか。本文中の語句を抜き出せ。

問2 傍線部B「後悔の感情を捨象した抽象形態」とあるが、それはどういうものか。分かりやすく説明せよ。

問3 傍線部C「過去を形成する」とあるが、それはどういうことか。分かりやすく説明せよ。

問4 傍線部D「未来を操作する」とあるが、それはどういうことか。分かりやすく説明せよ。



問5 傍線部Eについて、なぜ、そう言えるのか。説明せよ。

問6 傍線部①～⑤のカタカナを漢字になおせ。

① スイリョウ

② ソウゲウ

③ セイコウ

④ サける

⑤ ヒョウバン

三 次の文章は、石山に参籠した和泉式部に、宮が文を届けさせたことを契機に交わされた、二人の歌の応酬を描いたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。(40点)

かかるほどに、八月にもなりぬれば、つれづれをもなくさめむとて、石山に詣でて、七日ばかりもあらむとて、詣でぬ。

宮、久しうもなりぬるかなとおぼして、御文つかはずに、童わらは、「ひと日まかりてさぶらひしかば、石山になむこの頃おはしますなる」と申さすれば、「さは、今日は暮れぬ。」<sup>①</sup>つとめてまかれ」とて、御文書かせ給ひて、賜はせて、石山に行きたれば、仏の御前にはあらで、ふるさとのみ恋しくて、かかるありきもひきかへたる身のありさまと思ふに、いともの悲しうて、まめやかに仏を念じ奉るほどに、高欄かうらんの下しものかたに人のけはひのすれば、あやしくて、見下ろしたれば、この童なり。あはれに、思ひかけぬ所に来たれば、「何ぞ」と問はすれば、御文さし出でたるも、常よりもふとひき開けて見れば、「いと心深う入り給ひにけるをなむ。など『かくなむ』とものたまはせざり」<sup>②</sup>イ。ほだしまでこそおぼさざらめ、後おくらかし給ふ、心憂く」とて、

「関越えて今日ぞ問ふとや人は知る 思ひ絶えせぬ心づかひを

いつか出でさせ給ふ」とあり。近うてだにいとおぼつかなくなし給ふに、かくわざとたづね給へる、をかしうて、

「あふみぢは忘れぬ □ と見しものを 関うち越えて問ふ人やたれ

『いつか』とのたまはせたるは。おぼろけに思ひ給へ入りにしかば、<sup>③</sup>

山ながら憂きは立つとも都へは いつかうちでの浜は見るべき

と聞こえたれば、「苦しくとも行け」とて、『問ふ人』とか。あさましの御物言ひや。

たづね行くあふさか山のかひもなく <sup>A</sup>おぼめくばかり忘るべしやは

まことや、

憂きによりひたやごもりと思ふとも あふみの海はうちでてを見よ

『憂きたび』とに『とこそ言ふなれ』とのたまはせられたれば、ただかく、

関山のせきとめられぬ涙こそ あふみの海とながれ出づ  
とて、端に、

こころみにおのが心もこころみむ いざ都へと来てさそひみよ  
思ひもかけぬに行くものにもがなとおぼせど、いかでかは。

ハ

(『和泉式部日記』による)

(注) ○石山……観音の靈驗所として多くの貴族が参詣したことで名高い、近江国の石山寺。

○宮……冷泉院皇子、敦道親王。

○童……宮に仕える少年。和泉式部への文の取次ぎ役。

○関……京から出て東国に向かう起点となる、近江国の逢坂山に置かれた関所。

○うちでの浜……近江国の歌枕「打出浜」に、山を「うち出る」意を掛ける。

○憂きたびごとに……世の中の憂きたびごとに身を投げば 深き谷こそ浅くなりなめ(『古今和歌集』よみ人知らず)

問 1 傍線部①～④を現代語訳せよ。

問 2 空欄イ～ハに、助動詞「けむ」「めり」「らむ」からもっとも適当なものを、各助動詞につき一回ずつ選び、各空欄にふさわしい活用形に改めて補え。

問 3 二重傍線部A「おぼめくばかり忘るべしやは」は、相手のどのような言葉を受けてそのように表現したもののか、説明せよ。

問 4 二重傍線部B「おのが心」は、誰のどのような心をいうか、説明せよ。

問 5 本文中には一首、序詞を用いた歌がある。そこでの序詞の技法について説明せよ。

問 6 和泉式部の歌が初めて入集した勅撰和歌集はなにか、答えよ。

四 次の文を読んで、後の問いに答えよ。(40点)

① 凡物莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>死。草木鳥獸昆虫、有<sub>ニ</sub>朝<sub>ニ</sub>生<sub>マレテ</sub>而暮<sub>ニ</sub>死<sub>スル</sub>者、有<sub>ニ</sub>春<sub>ニ</sub>夏<sub>ニ</sub>生<sub>マレテ</sub>而秋<sub>ニ</sub>冬<sub>ニ</sub>死<sub>スル</sub>者、有<sub>ニ</sub>十<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>百<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>千<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>死<sub>スル</sub>者。② 雖<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>遲<sub>ニ</sub>速<sub>ニ</sub>相<sub>ヒ</sub>去<sub>ルコト</sub>曾<sub>レ</sub>幾<sub>ナラハテ</sub>何時<sub>ゾ</sub>。③ 惟<sub>レ</sub>人<sub>モ</sub>亦<sub>タ</sub>然<sub>リ</sub>。方<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>生<sub>クル</sub>時<sub>ニ</sub>、勞<sub>スル</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>所<sub>レ</sub>為<sub>ス</sub>、淫<sub>スル</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>所<sub>レ</sub>好<sub>ム</sub>、乱<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>思<sub>フ</sub>。其<sub>ノ</sub>經<sub>シテ</sub>營<sub>ビ</sub>不<sub>レ</sub>已<sub>ズ</sub>。若<sub>シ</sub>無<sub>キ</sub>復<sub>タ</sub>有<sub>ニ</sub>尽<sub>クル</sub>期<sub>ト</sub>者<sub>ノ</sub>。及<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>氣<sub>シテ</sub>散<sub>リ</sub>而<sub>ニ</sub>死<sub>スル</sub>、則<sub>チ</sub>驕<sub>ラ</sub>然<sub>トシテ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>ス</sub>肉<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>白<sub>ク</sub>骨<sub>ヲ</sub>。与<sub>ニ</sub>草<sub>ニ</sub>木<sub>ニ</sub>鳥<sub>ニ</sub>獸<sub>ニ</sub>昆<sub>ニ</sub>虫<sub>ニ</sub>之<sub>ノ</sub>變<sub>ヒ</sub>滅<sub>ス</sub>何<sub>ゾ</sub>異<sub>ナラン</sub>乎。君<sub>ハ</sub>子<sub>ハ</sub>知<sub>ル</sub>之<sub>ヲ</sub>。故<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>形<sub>ニ</sub>体<sub>ニ</sub>之<sub>ノ</sub>有<sub>ク</sub>無<sub>ク</sub>為<sub>サ</sub>中<sub>ニ</sub>生<sub>ト</sub>死<sub>ト</sub>、而<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>志<sub>ニ</sub>氣<sub>ニ</sub>之<sub>ノ</sub>消<sub>ス</sub>長<sub>ス</sub>為<sub>ニ</sub>生<sub>ト</sub>死<sub>ト</sub>。吾<sub>ハ</sub>今<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>形<sub>ニ</sub>体<sub>ニ</sub>無<sub>キ</sub>恙<sub>ツツガ</sub>、而<sub>レ</sub>志<sub>ニ</sub>氣<sub>ニ</sub>已<sub>ツク</sub>竭<sub>レバ</sub>斯<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>死<sub>セリト</sub>矣。吾<sub>ハ</sub>志<sub>ニ</sub>氣<sub>ニ</sub>配<sub>シ</sub>乎<sub>ニ</sub>道<sub>ニ</sub>義<sub>ニ</sub>、発<sub>シ</sub>乎<sub>ニ</sub>文<sub>ニ</sub>章<sub>ニ</sub>、且<sub>ツ</sub>与<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>地<sub>ニ</sub>同<sub>ジク</sub>レバ流<sub>レバ</sub>、而<sub>レ</sub>奚<sub>ソ</sub>有<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>形<sub>ニ</sub>体<sub>ニ</sub>乎。故<sub>ニ</sub>簡<sub>ニ</sub>策<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>載<sub>シ</sub>、古<sub>ハ</sub>聖<sub>ハ</sub>

賢人、雖<sup>モ</sup>死<sup>スルコト</sup>已久<sup>シト</sup>矣、而其輝光<sup>シカモノ</sup>常<sup>スルコト</sup>如<sup>ニ</sup>日星之燦然<sup>ニ</sup>。蓋<sup>シ</sup>其人<sup>ノ</sup>至<sup>ルマデ</sup>也。

(清・張士元『嘉樹山房集』による)

(備考) この文には、設問の都合で送りがなを省いたところがある。

(注) 淫之以所好 || 嗜好によって惑わされること。

経営 || 苦心して事に当たること。

髡然 || 死体が白骨化したさま。

志気 || 何かをなさそうとする意志。精神。

無恙 || 病気がなく、無事であること。

簡策 || 文字を記した竹のふだ。竹簡。

古聖賢人 || 古代の聖人や賢人。

燦然 || 光り輝くさま。

問 1 傍線部①「凡物莫不有死。」を、書き下し文に改めよ。

問 2 傍線部②「雖有遲速、相去曾幾何時。」を、わかりやすく解釈せよ。

問 3 傍線部③「之」は何を指すか。その内容を説明せよ。

問 4 傍線部④「其人」が指すものを、文中の語を用いて記せ。

問 5 波線部③「惟」、⑥「不已」、⑦「不能」、⑧「已」、⑨「如」の読み方を、送りがなも含めて、すべてひらがなで記せ(現代かなづかいでもよい)。

問 6 次の文章の空欄( A )～( D )に、ふさわしいものを後の(ア)～(ク)から選び、その記号を記せ。

儒家の祖とされる孔子は、死後の問題より生の問題により強い関心を持ち、( A )と述べている。一方、道家の思想家である莊子は、死と生を超越した考え方を持ち、( B )と述べている。儒家の書物としては( C )があり、道家の書物としては( D )がある。

(ア) 「古の真人は生を説ぶことを知らず、死を悪むことを知らず。」

(イ) 「未だ生を知らざるに焉んぞ死を知らん。」

(ウ) 史記 (エ) 老子 (オ) 韓非子

(カ) 墨子 (キ) 楚辞 (ク) 孟子